中部地方の方言についての方言地理学的研究(I)

江　端　義　夫

(1976年9月20日受理)

目　次

○はじめに
一　中部地方の方言研究の現状
二　私の中部地方の方言研究の目的
三　目的に応じた研究作業
四　「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第一次研究作業
五　「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第二次研究作業
六　「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第三次研究作業
○おわりに

○はじめに

(1)

私は，愛知県の知多半島に生をうけ，ここのことばにはぐくまれた。広島大学に学んで，藤原与一先生のご教導をいただき，方言研究に従ってきた。研究の中心は，一貫して，日本の中部地方の方言についての研究であった。

(2)

日本方言に見られる東西方言のちがいは，すでに奈良時代から，意識されてきたものであった。昭和初期，服部四郎氏によって，アクセント面における東西両方言の境界線が発見された。しかし，それは，明治時代の国語調査委員会が示した糸魚川・浜名湖線と異なっていた。爾来，今日に至るまで，境界線に関して，諸見解がある。それらは，立場のちがいによるもので，みな，理が通っている。最近は，区画論が，問題視されることが少ない。区画し，境界線を見つけることだけでは，方言研究上の，発展的な意味が乏しいからであろうか。

私は，方言地理学（言語地理学）が，事理を究明しつつも，「文化」の高次元で，人々の生活の今日と過去と未来とを考察する慈愛の眼がなくては，人間の学問としての方言の学たりえないと思う。

一　中部地方の方言研究の現状

中部地方の方言の全体を対象とした研究には，どのようなものがあろうか。

牛山初男氏の「語法上より見たる東西方言の境界線について」（『国語学』12輯，昭和27.2）は，約四半世紀後の今日まで，中部地方の方言研究での金字塔とされよう。氏は，国語調査委員会が，明治末年に為した『口語法調査報告書同分布図』の結果を，半世紀後に，追試しようとされた。方法は，通信調査が主であった。項目は五つにしぼられていた。すなわち次のとおりである。

1　雨が降るので行かない。⟷　雨が降るので行かん（ぬ）。
　それは取らない。⟷　それは取らん（ぬ）。
2　私のはこれだ。⟷　私のはこれぢゃ（や）。
3　雪が降って白くなった。⟷雪が降って白う（白）なった。
4　君はこれを受けろ。⟷　君はこれを受けよ（い）。
　明朝六時に起きろ。⟷　明朝六時に起きよ（い）。
5　私はこれをあの店で買った。⟷　私はこれをあの店で買うた。
　私はこれをあの店で買って来た。⟷　私はあの店で買うて来た。

牛山氏のご研究は，東西方言の境界線が，半世紀後においても，文部省が明治時代に調査して発見した親不知と浜名湖とを結ぶ線と同じであることを，明らかにした。以後も，氏は，中部地方の方言について，通信調査を主とした研究成果を発表してこられた。（『東西方言の境界』昭和44年3月　信教印刷㈱）

ここで，私は，牛山氏のご論考について，気づいたことが二つある。一つ，これは区画そのことに重点がおかれているが，言語地理学的研究の方法としては，狭すぎるのではないか。二つ，氏の調査項目は，文法項目だけに限られている。この項目処置は，区画を得る

のには不充分ではないか。

牛山氏以後，中部地方の方言を覆った研究に，『日本言語地図』(Ⅰ～Ⅵ　国立国語研究所）がある。

一県単位または小地域についての方言地理学的研究には，次のような諸業績が発表されている。

○柴田武氏『言語地理学の方法』　昭和44　筑摩書房

○奥村三雄氏『岐阜県方言の研究』　昭51　大衆書房，「方言の区画」（『国語国文』27－3　昭33）

○馬瀬良雄氏『信州の方言』　昭46　第一法規，「信飛国境地帯でのカタツムリとナメクジの方言分布とその解釈」（『国語学』71　昭42）

○真田信治氏「越飛国境地帯における方言の分布」（『越飛文化』16　昭47）

○川本栄一郎氏「石川県手取川流域の方言分布」（『金沢大学教育学部紀要』23　昭49）

○渡辺富美雄氏『新潟県における鳥追い歌―その言語地理学』　昭49　野島出版

私は，中部地方域に認められる方言状態の研究に従おうとしている。その第一次的な研究作業をまとめたものが，修士論文「中部地方方言の方言地理学的研究」であった。その研究の一部を「愛知県地方の方言の分派とその系脈」（『広島大学教育学部紀要』21　昭48）に報告している。

二　私の中部地方の方言研究の目的

私が本研究課題に従った初期の動機は，東西二大方言の接衝地帯にある中部地方の方言の区画が，むつかしいとされているからであった。しかし，今，私はそれらの初期の動機を下地にしつつ，東京と京都という二大主都の中間にあって，古来，文化の刺激を受けやすかった①中部地方の方言状態を明らかにし，②人間言語の諸法則を究明しようとするものである。

対象領域は，日本の中部地方の9県（岐阜県・愛知県・長野県・山梨県・静岡県・福井県・石川県・富山県・新潟県）とその周辺域とである。

私は，とくに，次の五ケ条を尊重しようとする。

(1)私ひとりで，200余地点の広域踏査に従う。第一次研究作業，第二次研究作業，第三次研究作業を通して，私ひとりが，調査活動に従う。

(2)対象領域が，9県にわたる。当該域は中部山岳地帯を擁する。地形が複雑で，日本の背梁山脈と一級河川が，中部地方を分画している。大積雪地帯と，ほとんど降雪を見ない地帯とがある。こうした自然環境の立体的な複雑さが，生活のちがいを生み出していると思われる。また，生活のちがいは，生活語としての方言の上にも，当然，影響を与えているはずである。偏差の大きい地域を対象とするところにおもしろさがあろう。

(3)各地点について，老年層女性の言語と少年層女子の言語とを調査する。言うまでもなく，藤原与一先生著『瀬戸内海言語図巻』（昭49　東大出版会）は，この種の良い手本である。

(4)第二次研究作業において，所期の地点での調査を完了し，再度，第三次研究作業において，先と同じ地点で調査をしはたす。私は，1地点について2度の調査活動を試みようとする。これは，同一地点に，合計5名を被調査者として選んだことになる。

(5)調査項目は，音声・表現法・語詞・その他にわたって，200余項目が整備される。対象域の個々の方言について，言語体系としての方言のありさまを，見透すことにつとめる。

以上私は，方言現実の総合的な把握を意図して，上記の目的をかかげた。

三　目的に応じた研究作業

上述の目的に即応して，私は，次のように研究作業を展開する。

(1)第一次研究作業

これは，中部地方域の方言研究をねらいつつ，愛知県およびその周辺域について，昭和41年から昭和43年まで，私が臨地調査および研究作業を行なったものである。

(2)第二次研究作業

これは中部地方域について，昭和51年の約8ケ月間に，老少二年層について，48項目での臨地調査および研究作業を行なったものである。

(3)第三次研究作業

第二次の研究作業をふまえて，同一対象域において，200余の調査項目を整えておこなう研究作業である。これを昭和52年から始めたいと考えている。

四　「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第一次研究作業

○はしがき

日本語方言の東西二大分派が接衝する地域に，中部地方の方言がある。中部地方の方言の下位に，愛知県地方の方言が存立する。

愛知県地方の方言の分派を認定し，その系脈を明らかにすることが目的であった。

1.　調査期間

昭和41年8月から昭和43年7月までであった。延べ日数は130日であった。

2．調査の方法

私一人の臨地調査であった。通信調査は，いっさい，行なわれなかった。

3．被調査者

老年層女性一名と，少年層女子二名である。被調査者に調査を頼うにあたって，次の条件を考慮した。

(a)老年層者

イ．土地に生まれ，土地に育った女性であること。

ロ．60才台であること。(明治28年から明治40年までに生まれていること。)

ハ．外住経験がないこと。(外住歴が3年以内であること。)

ニ．生業が，調査地の主生業であること。

(b)少年層者

イ．両親ともに土地生まれであること。(少くとも片親が土地生まれであること。)

ロ．中学二年生であること。

ハ．外住経験がないこと。

ニ．生業が，調査地の主生業であること。

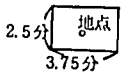
4．調査地点

調査地点は合計80であった。県別内訳は次のとおりであった。

三重県── 5地点，愛知県── 57地点，岐阜県── 5地点，静岡県── 11地点，長野県── 2地点

5．調査地点選定規準

東経 137度，北緯34度40分を基点とし，南北に 2.5分，東西に3.75分の長方形を単位として，区線した。



ごとに一地点を決定した。原則として，当区域の中央に位置する恰好な一集落を選んだ。2地点の間隔は，だいたい南北 9km，東西13kmであった。

6．踏査順路

原則として，対象地域を，南から北へ，北から南へと進み，らせん状に(平面を考えれば乙字状に)，東の方へと順次，踏査していった。

7．調査項目

調査項目の選定にさいして，(イ)即生活的な日常語であること。(ロ)全国でどれほどか地方差が見られることばであること。(ハ)東日本的色あいの見られることばであること。(ニ)西日本的色あいの見られることばであること。(ホ)愛知県において多彩な分化をみせることばであること。(ヘ)生活語記述体系をなしていること等を考慮した。

調査項目は，全部で285であった。調査項目は，方言の体系的存立をとらえうるように，言語体系の構造を把握すべく，体系的に選ばれた。すなわち，(a)音声 (b)表現法 (c)語詞 (d)意義 (e)アクセント (f)生活事象，を覆った。

以下に，調査項目を，調査順序に列記する。今，調査項目全体を，項目体系として表示することは省略する。

1昨日・一昨日　2昨夜　3晩方・夜中　4夜訪問のあいさつ　5明日　6明後日・明々後日　7朝のあいさつ　8日中のあいさつ　9日中訪問のあいさつ　10久しく　11久しぶり　12今度(コンドカイシ)　13寒くては　14暖かく　15洗濯　16まぶしい　17吊してある　18赤い・明るい　19美しい・黄色い　20おばさん・私の家　21けちんぼう　22臆病者　23末っ子　24曽孫　25育てる　26雄・雌　27ふざける　28くすぐる　29くすぐったい　30嘘をつく・嘘つき　31殴・殴る　32倒れる　33もったいない(オトマシイ)　34わやする　35わざと　36叱る　37急いで，逃げろ　38びり　39息苦しい　40しじゅう，歩いて　41羨しい　42骨ごと　43もったいない　44粗末な　45南瓜　46一つずつ　47いくつ　48一つだけ　49担う　50提げる(絵)　51赤ん坊(絵)　52おんぶする(絵)　53お手玉　54考える(カンコースル)　55肩車(絵)　56恐い　57むやみに　58つばめ(絵)　59かたつむり(絵)　60蟻(絵)　61ミミズ(絵)　62目高(絵)　63ザリガニ(絵)　64乾燥する(ハシャグ)　65水すまし(絵)　66ひきがえる(絵)　67おたまじゃくし(絵)　68貝殻(絵)　69山頂(絵)　70太陽(絵)　71虹(絵)　72帰りヤースバセ　73ナサイ　74ラレー　75オイデン　76オイジャーノ　77ゴザレ(イ)　78～ンショ　79ンサイ　80先生　81レル　82オジャル　83ゴザル　84シャイ(レ)　85書きナル　86書かハル　87為ナハル　88行かっセル　89見サッセル　90行かシた　91行かンシた　92見ヤーセ・見ヤッセ　93オ見リン　94オ帰リル　95仕事してミエル　96下さい　97ヤス　98子どもの買物ことば　99大人の買物ことば　100オクレン　101買って・だめだ　102行かなかった　103行かないで・行こう(勧誘)　104行こう(意志)　105晴れるだろう(推量)　106それから　107よう起きれん　108丸い・見リー　109歩きながら　110象のように・あの木テヤ　111植えたものだそうだ(伝聞)　112いたっケ(文末詞)　113しまわずに(シマイコナシデ)・降ると(フルトサイガ)　114どこかで(ドコゾデ)　115走って行きよる(動作進行態叙法)　116夕立というものは　117降らなければ・育つまい(シトナルマイ)　118今年あたり　119そうかもしれない　120分るものか(ワカラスカ)　121こんなに・雨の日ばかり　122たいくつだから(サニ)・借りる　123好きで

からに　124 端　125 行くと言って　126 何か　127 パンが食べたい　128 いいえ　129 はい　130 するな　131 あげるから（アゲルニヨッテ）　132 そうすると　133 叱られた　134 こちら側（コッチベタ）・あそこの附近（ソコナテ・ネキ）　135 誰が何と言おうとも・行かねばならない　136 行ったのに　137 暑いノー・ノン・ノンホイ・ノンシ　138 あのノー・ネー・ヨー・ナン　139 あのエモ・エモシ　140 寒い日だナンシ・ナンヘー　141 そうだゾン・ゾネ・ゼーモ　142 元気だワン　143 大きくなったジャン　144 上手だニ　145 驚いたイラ　146 乗ってエン　147 見たカン　148 知っているケェ・知っとるキャーモ　149 知っ（て・と）るラ　150 いいゾナ・ワイ・ワイモ　151 本当だテヤ　152 知らんゼン・ジョ　153 困ったノモ・ノモシ・ノーシ　154 すまんナモ・ナモシ・ナモヘー　155 かまきり（絵）　156 つくし（絵）　157 なめくじ（絵）158 はこべ（絵）　159 彼岸花（絵）　160 とんぼ（絵）　161 とんぼだ　162 おおばこ（絵）　163 こがねむし（絵）　164 蛍（絵）　165 少くなっつろう　166 お尻（絵）　167 とうもろこし（絵）　168 馬鈴薯（絵）169 さつまいも（絵）170 かかし（絵）171 いなご（絵）172 稲架（絵）173 稲むら（絵）174 こおろぎ（絵）175 台所 176 舌 177まな板（絵）178 すりこ木（絵）179 湯気（絵）180 煙（絵）181 煙草（絵）182黒い・白い（絵）183 蜘蛛（絵）184 蛆（絵）185とかげ（絵）186 馬（絵）187 蹄（絵）188 片足とび（絵）189 じゃんけん（絵）190 中指・薬指　191 手拭い（絵）192 数珠（絵）193 おにぎり（絵）194 鏡（絵）195 正座する（絵）196 大きい・小さい（絵）197 鉛筆（絵）198 太い・細い（絵）199 袖なし（絵）200 結婚図　201 買物図　202 ことばのちがう集落　203 ことばの似た集落　204 ことばの上品さ（大阪・名古屋・東京）

以下は，アクセント用の語

絵，牛，葉，飴，湯，傷，火，歌，日，音，血，冬，毛，櫛，蚊，花，帆，雲，初め，稲，田舎，息，氷，松，二つ，秋，つるべ，鮒，緑，窓，力，小麦，紅葉，頭，恨み，拳，涙，鰈，命，心，背中，誠，盥，栗，盃，聞く，咲く，飛ぶ，売る，消す，切る，書く，蹴る，食う，読む，握る，沈む，浮かぶ，遊ぶ，起きる，溶ける，叩く，許す，入る，悲しむ，従う，集める，表わす，驚く，無い，良い，甘い，遠い，薄い，高い，低い，多い，悲しい，涼しい，尊い，若い

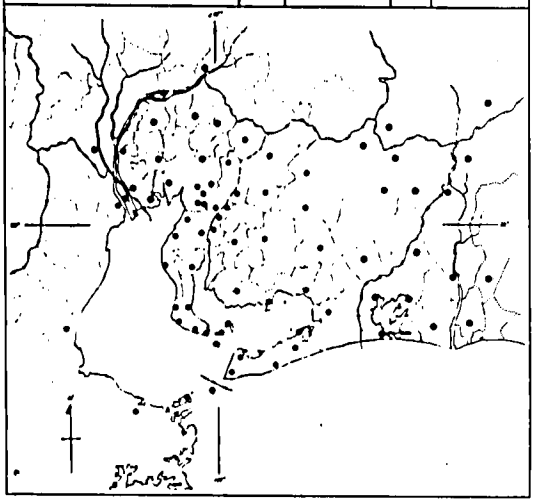
8．方言事象分布事態

以上の調査項目にもとづいて，600余枚の方言事象分布図を作製した。以下に，音声面・表現法面・語詞面の図の中から，1項目ずつ選出して，解説する。

(1)音声面　鏡（老年層）……図1

これは，語中の／g／の実音相を検するものである。愛知県地方は，明確に三分されている。濃尾平野部に［-ŋa-］があり，とんで，豊橋より北部一帯の山地に［-ŋa-］が見える。中間の知多半島・渥美半島・島嶼および三河には，これがなく，語中の／g／は，［-ga-］と発音される。三重県側も［-ga-］であることが注目される。

図1　鏡　<老>　•　カガミ〔kaŋami〕　•　カガミ〔kagami〕



(2)音声面　鏡（少年層）……図2

図2　鏡　<少>　•　カガミ〔kaŋami〕　•　カガミ〔kagami〕

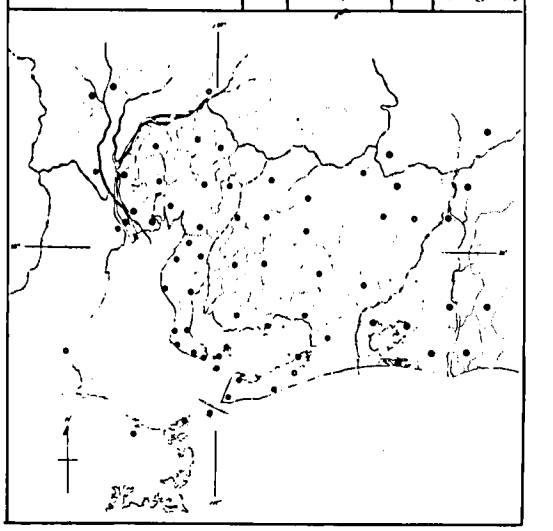


図3　歩きながら　<老>

∘	アルキナガラ〔arukinagara〕(〔arukinaŋara〕も)	+	アルキアルキ〔arukiaruki〕
○	アルキガ(°)テラ〔arukigatera〕(〔arukiŋatera〕も)	Y	ミテミテ〔mitemite〕
◪	アルキガ°ツラ〔arukiŋatsura〕		ミテジュン〔miteʒuŋ〕
▲	アルキモテ〔arukimote〕	6	アルキカタケニ〔arukikatakeni〕

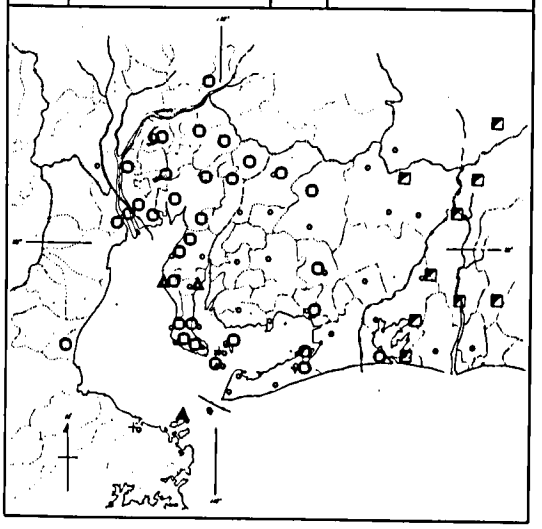
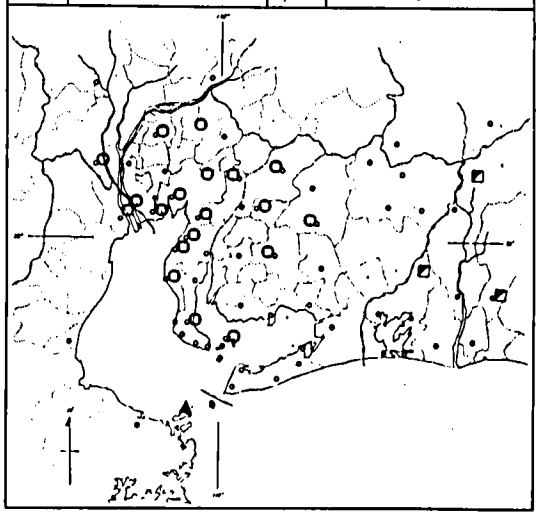


図4　歩きながら　<少>

∘	アルキナガ(°)ラ〔arukinagara〕(〔arukinaŋara〕も)	◪	アルキガ°ツラ〔arukiŋatsura〕
○	アルキガ(°)テラ〔arukigatera〕(〔arukiŋatera〕も)	▲	アルキモテ〔arukimote〕
		↑	アルイトッテ〔aruitot:e〕



少年層図においては，〔kagami〕の分布勢力が，だんぜん強い。三河および両半島島嶼の〔kagami〕（〔kaɣami〕も），左右両脇の〔ŋa〕を浸触して，〔ga〕に改新させている。-ŋa->-ga-の傾向を，はっきりと読みとることができよう。

(3)表現法面　歩きながら（老年層）……図3

「アルキナガラ」「アルキナガラ」の弱い全域分布がある。

静岡県の浜名湖と岐阜・長野県境とを結ぶ線より東に，「アルキガ°ツラ」が見られる。愛知県北東部の津具村にも，「アルキガツラ」がある。それ以外は，「アルキガ°テラ」である。濃尾平野はすべて「アルキガ°テラ」である。「アルキモテ」「アルキモッテ」などの近畿的とも言える事象が，答志島と知多半島2地点とに見られる。この分布図は，「アルキガ（ガ°）テラ」と「アルキガ°ツラ」とが，対立相を見せている。

(4)表現法面　歩きながら（少年層）……図4

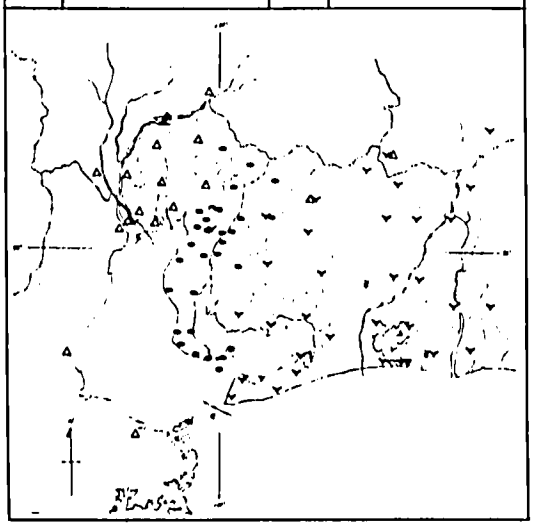
分布のありさまが，老年層図のよりも，簡素になっている。なぜならば，老年層図でも全域分布であった「アルキナガ（カ°）ラ」の勢力が大勢を占めたからである。だから，愛知県下の「アルキガ（カ°）テラ」は「アルキナガ（カ°）ラ」と併存している場合が多い。また，遠州本位の「アルキガ°ツラ」も，共通語と同じ形式の「アルキナガ°（ガ）ラ」に，あらかた，置換してしまっている。少年層図にあっては，老年層図におけるように，「アルキガテラ」対「アルキガ°ツラ」の分布ではない。これは，「アルキナガ°（ガ）ラ」対「アルキガ（カ°）テラ」，「アルキナガ°（ガ）ラ」対「アルキガ°ツラ」の図になっているのである。早晩，「アルキナガ°（ガ）ラ」一色に変る時が来るであろう。

(5)語詞面　提げる（老年層）……図5

二人で協力して，一つの荷物を，宙につりあげる動作について問うた。濃尾平野から三重県沿岸にかけて，「ツル」がある。知多半島島嶼および半島北部丘陵地帯にかけては，「ヅル」が分布する。共通語での「ずる」は，当域で「引きずる」と言い慣わしているので，伝達上の混乱は起きない。岡崎市以東の地では，「サゲ（ゲ°）ル」と言う。「ヅル」の生成の因は不明である。「ツル」と「サゲル」との混淆では，決してない。

図5　提げる　<老>

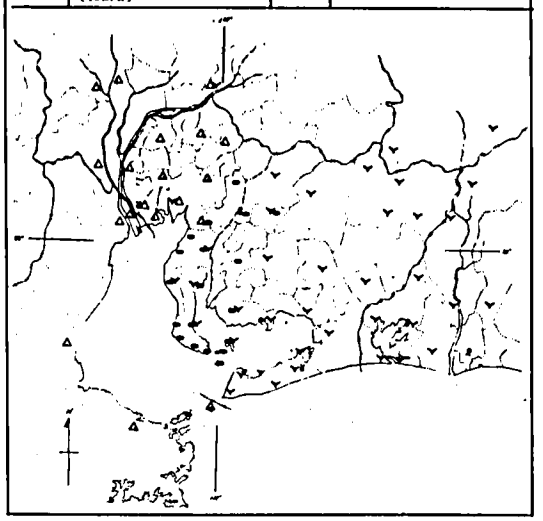
▼	サゲル (sageru)	∩	ショベツル (ʃobetsuru)
▬	ヅル (dzuru)	▮	モツ (motsu)
	(ズル (zuru)も)	▮	サシモツ (saʃimotsu)
△	ツル (tsuru)		



(6)語詞面　提げる（少年層）……図6

図6　提げる　<少>

▼	サゲル (sageru)	▮	モツ (motsu)
▬	ヅル (dzuru)	▬	モチアゲル (mojiageru)
	(ズル (zuru)も)	▬	イッショニモツ (iʃ:onimotsu)
△	ツル (tsuru)	▮	フタリデモツ (futaridemotsu)



少年層図では，老年層図と，ほとんど分布が同じである。これは，驚くべき事実である。土地人にとって，「ヅル」が方言事象だと感得されていない場合が多かった。それほどに，生活表現に溶けこんだ語である。この図は，老年層から少年層へと，言語事象が常に共通語化を経るとはかぎらないことの一例証である。

9．方言分派系統の認定と把握

当該諸方言事象分布図を重ねあわせれば，事象分布のありように，諸種の分布傾向が見定められる。

傾向分布の累積が認められる境域に，分派が認定される。

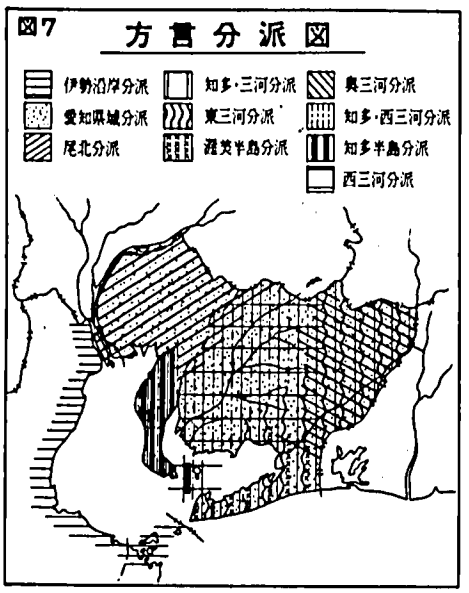
分派関係の裁定は，分派裁定のための客観的な規準項目が整えられなければならない。

以下のように，当該方言分派相が把握された。

①伊勢沿岸分派
②愛知県域分派
③尾北分派
④知多三河分派
⑤東三河分派
⑥渥美半島分派
⑦奥三河分派
⑧知多西三河分派
⑨知多半島分派
⑩西三河分派

これらを総括して，諸分派の主体的な関係を，図に示せば，次のとおりである。

図7　方言分派図



方言分派系脈論

帰結した10の方言分派相互の関係を論じる。そして，さらに，事象本位に論究し，知多半島中南部と知多三河島嶼と渥美半島南端部とに，当該域の方言古系脈を認出した。

以上が，第一次「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の概要である。

（付記）本研究の原題は，「中部地方方言の方言地理学的研究」であった。それを，「中部地方の方言についての方言地理学的研究」と改めた。

五　「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第二次研究作業

1．調査期間

方言地理学的研究において，方言資料は，その時間的斉一性が問題とされる。ために，短期間に調査するのが望ましい。

私は，中部地方域の，短期間調査を行なう。第二次研究での調査期間は，昭和51年3月から，昭和51年10月までの，約8ケ月間である。春季休暇と夏季休暇とを，おもな臨地調査日とした。かつ，長期休暇以外にも，可能なかぎり，私は，当該地での方言調査活動に従った。

2．調査の方法

私が直接，対象地へ臨んだ。被調査者の生きの良い言語を聴録することにつとめた。通信調査は行なわれなかった。

3．被調査者

私は，各地点で，老年層女性1名の言語と，少年層女子1名の言語とを対象にした。

第二次研究のばあいは，"広域短期間調査"をねらいとしたため，老・少年層者の言語を聴録することにつとめつつも，老年層者ののみを調査して，少年層者のを省略した地点がある。

被調査者に，調査を願うにあたって，次の条件を考慮した。

(a)老年層者

イ．土地に生まれ，土地に育った女性であること。

ロ．60才台であること。（明治40年から大正5年までに生まれていること。）

ハ．外住経験がないこと。（外住歴が3年以内であること。）

ニ．生業が，調査地の主生業であること。

(b)少年層者

第一次研究のと同じである。

イ．両親ともに土地生まれであること。（少くとも，片親が土地生まれであること。）

ロ．中学二年生であること。

ハ，外住経験がないこと。

ニ，生業が，調査地の主生業であること。

4．調査地点

9県（岐阜県・愛知県・長野県・山梨県・静岡県・福井県・石川県・富山県・新潟県）と，その周辺域とに定めた調査地点数は，200余である。

5．調査地点選定規準

東経137度，北緯35度を基点とし，東西南北に，約15㎞間隔で，碁盤の目状に線を引き，その交点を調査地点と定めた。ただし，そこが無居住地であるばあいは，近隣の集落に移した。時に，それを，予定地点から省くこともあった。

6．踏査順路

各県ともに，原則として西から東へと調査を進めた。踏査の順路は，地形・地理の自然に即するように心がけた。もっとも，交通機関の便に即して動くことも多かった。

7．調査項目

私は，48項目の小体系を整えた。小項目体系ではあるが，これは，音声面・表現法面・語詞面の項目を包有する。ここに私は，言語体系を見透す精神を生かすように心がけた。第一次研究作業での項目を生かした。

以下に，調査項目を，調査順序に従って記す。なお，調査項目全体を，項目体系として表示することは省略する。

1朝のあいさつ　2あのねえ　3シャレ（シャイ）　4ラレー　5晴れるだろう　6知っているでしょ　7私のです　8買って・だめだ　9行かなかった　10行かないで・行こう（勧誘）　11私も行こう（意志）　12まあ，あがりなさい　13骨ごと　14くすぐる　15くすぐったい　16まぶしい　17息苦しい　18お手玉（絵）　19蟻（絵）　20稲架（絵）　21袖なし（絵）　22西瓜（絵）　23早く・逃げろ

以下はアクセント用の語

24血（が）　25毛（が）　26蚊（が）　27帆（が）　28湯（が）　29歌（が）　30音（が）　31冬（が）　32雲（が）　33波（が）　34緑（が）　35つるべ（が）　36小麦（が）　37力（が）　38紅葉（が）　39甘い　40頭（が）　41驚く　42命（が）　43心（が）　44背中（が）　45誠（が）　46盥（が）　47薬（が）　48蚕（が）

8．方言事象分布事態

語詞項目の一つ，「蟻」をとりあげ，方言事象分布事態を，以下に例説する。

蟻（老年層）……図8

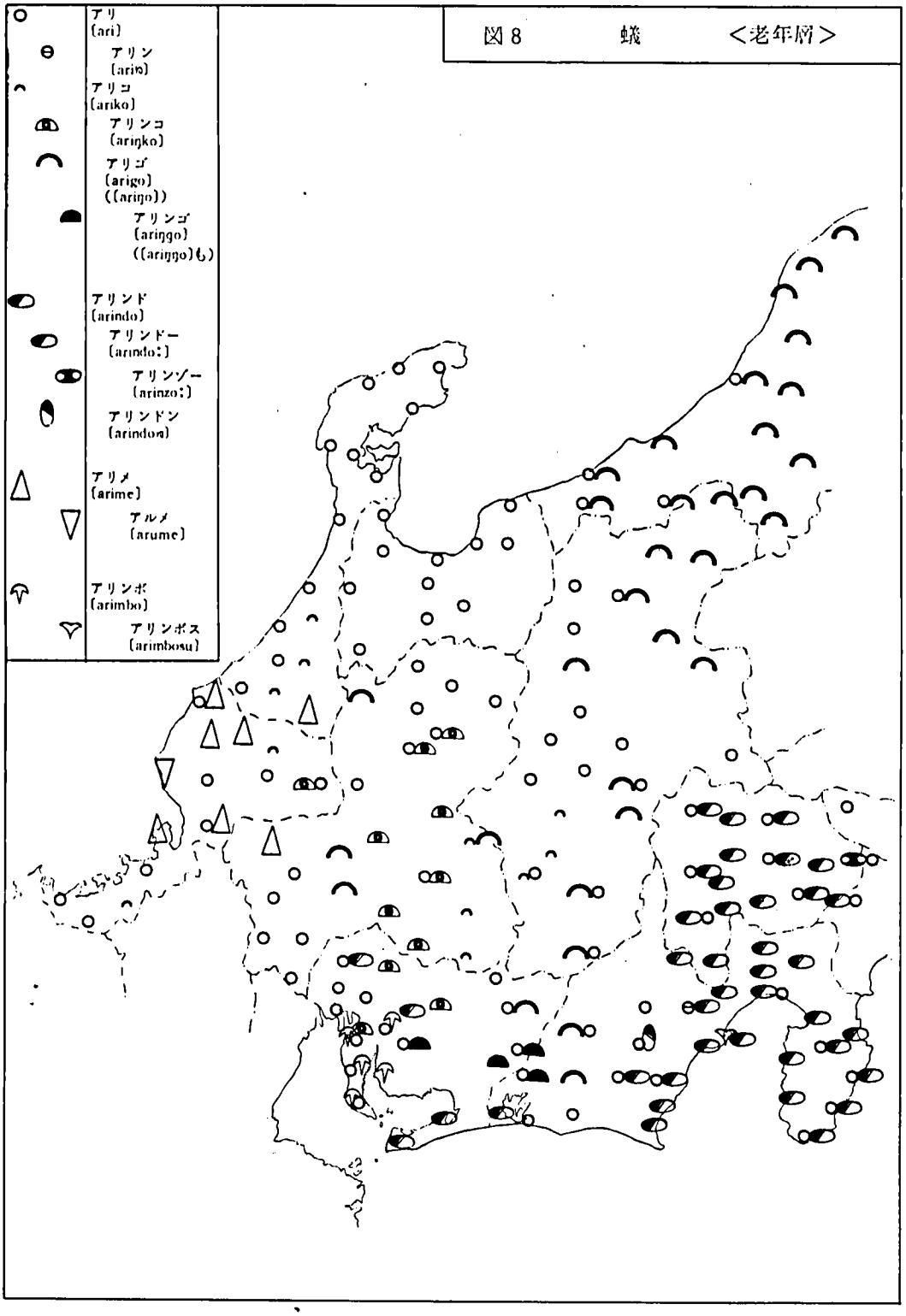
「蟻」の調査では，絵カードを用いた。適格な答えが得られない場合は，調査カードに印刷されている質問文に依処した。それは，次のとおりである。「これは甘いものが好きです。行列をつくります。力もちです。これ（絵カードを指示）を何と言いますか。」

＜方言事象分布＞

(1)　「アリコ」

岐阜県南部と長野県南部の木曽路に，「アリコ」が

図8　蟻　<老年層>


アリ
〔ari〕
アリン
〔ariŋ〕
アリコ
〔ariko〕
アリンコ
〔ariŋko〕
アリゴ
〔arigo〕
(〔ariŋo〕)
アリンゴ
〔ariŋgo〕
(〔ariŋgo〕も)
アリンド
〔arindo〕
アリンドー
〔arindo:〕
アリンゾー
〔arinzo:〕
アリンドン
〔arindoŋ〕
アリメ
〔arime〕
アルメ
〔arume〕
アリンボ
〔arimbo〕
アリンボス
〔arimbosu〕

分布する。とんで，加賀に，これがまとまって分布する。福井県下の加賀よりの一地にも，これが見られる。

(2) 「アリゴ」

愛知県東部の奥三河および静岡県西部の天竜川上流から北方に向けて，「アリゴ」が分布する。信州では，伊那路を経て南北に，これの分布がたどられる。岐阜県下では，辺境と中央部とに，これが見られる。

(3) 「アリンコ」

岐阜県を中心に，「アリンコ」の分布が見られる。愛知県にも，分布の足がのびている。福井県の岐阜県よりの一地にも，これがある。

(4) 「アリンゴ」

これは，愛知県の三河を中心に分布する。遠州の西部一地にも，これがある。

(5) 「アリンド」

東海道域分布といえるか。「アリンド」は，静岡県を中心に強い分布を見せ，山梨県および愛知県の中央部と半島島嶼部とにも，これが見られる。

(6) 「アリンドー」

これは，山梨県下だけに分布する。静岡県下で「アリンド」と短呼するところを，山梨県下で「アリンドー」と末尾音を長呼させているのは，興味ぶかい。

(7) 「アリメ」

福井県の越前を主域として，「アリメ」が分布する。若狭や加賀や美濃へも，分布がのびている。

(8) 「アリンボ」

愛知県の知多半島中心に，「アリンボ」が分布する。

＜方言事象分布解釈＞

(a) 「アリ」＞「アリコ」について

二事象は併存することがある。「アリ」は「アリコ」へと容易に変化しえた。それは，すでに早いころのことであったろう。両分布にまとまりが見られない。ゆえに，この分布相は，「アリ」＞「アリコ」の現象が，どこにでも起りうるものであったことを示唆する。

(b) 「アリコ」≷「アリゴ」，「アリコ」＞「アリンコ」について

「アリコ」「アリゴ」「アリンコ」の三事象は，相接近して分布する。岐阜・愛知・長野での分布を見ると，岐阜県に「アリコ」がある。その外周に「アリンコ」がある。その外周部に「アリゴ」がある。だから，「アリゴ」＞「アリコ」の場合も，ありえたかもしれない。したがって，「アリ」＞「アリゴ」へと，「アリコ」を経ずに，いっそくとびに変化した場合もあったろう。伊那路の分布は，「アリ」＞「アリゴ」を考えせしめよう。

(c) 「アリンコ」＞「アリンゴ」，「アリゴ」＞「アリンゴ」について

岐阜長野の北部に，「アリンコ」「アリゴ」があり，南部の平野部に「アリンゴ」が分布する。分布新化を起したと考えられる。三河中央部の「アリンゴ」は，「アリンコ」から変化したろう。奥三河・遠州の「アリンゴ」は「アリゴ」からの変化であろうか。

(d) 「アリンド」・「アリンドー」，「アリメ」，「アリンボ」の特殊分布について

「——ド」（奴・徒）の接辞をもつ分布は，太平洋側の東海に著しい。静岡・山梨中心の「アリンド（ー）は，三河湾域をおおった後，東海道に沿って西へ，北へと分布域をのばそうとした。しかし，三河北部には，もともと「アリコ（ゴ）」系の諸語があった。知多半島および知多丘陵には，「——ボ」（坊）の接辞をもつ「アリンボ」が強力に分布していた。（第一次研究作業での「蟻」の分布図が比照される。）ために，「アリンド」の西進・北進が，阻止されたと見られる。

「アリメ」は，日本海側の分布とされる。「——メ」（奴）は，人・動物などの名の下につけて，ののしる意を表わす接辞である。越前を核として，これが収縮分布の状況を呈している。

＜方言事象分布動態＞

共通語「アリ」の分布の伸びは，絶大である。

中部地方域において，老年層図で「アリコ」が分布していた地点に，少年層図では「アリンコ」が新しく分布している。

「アリメ」は，福井県域で，少年層において減少の一途をたどっている。

「アリンボ」が，少年層においても，知多半島の南部で，余命をとどめている。

少年層図で，「アリンド」の分布は，愛知県域で弱化している。三河湾域では，「アリンゴ」が増成している。静岡県域で，老年層図に隆盛を見せた「アリンド」の分布は，少年層図で，一転して「アリンコ」のに変わっている。

昨今の社会生活の急速な変容が，共通語と方言との二重言語生活を促進せしめているのであろうか。

六 「中部地方の方言についての方言地理学的研究」の第三次研究作業

第一次研究作業を10年前（昭和41年）に開始した。そして，第二次研究作業を昭和51年に行なった。この間10年間における当該地域社会の生活文化百般にわたる著しい変化には，目を見はるものがあった。と同時に，昭和41年当時，中部地方の方言社会の多くは，一個独立の言語共同体と見なしうる姿を呈していた。しかし，かかる地域の老年層者も，いまや，おおよそ，

方言と共通語との二重言語生活を，よぎなくされている。

現今の方言状況にかんがみつつ，本次の研究作業においても，私は，第一次研究・第二次研究の大綱を踏襲するつもりである。すなわち，(1)中部地方域の方言事態を把握することと，(2)当該域方言の方言地理学的研究を通して，人間言語の諸法則を明らかにしようとする。

日本の腹部にあたる中部地方域の各地では，急速な言語変容が進み，共通語への画一化が行なわれている。一定の短い期間を区切って，当該域に行なわれている方言動態を把握する仕事の歴史的意義は大きいと，私は考える。

さて，第三次の研究作業は，第二次研究作業とほぼ同一地点のことばを調査研究するが，第二次のと若干異なる点がある。それは，以下のとおりである。

(イ) 調査項目は，200余とする。

(ロ) 被調査者のうち，少年層者は2名とする。第二次研究において，私は，老年層者・少年層者ともに，1地点1名を対象として，言語調査に臨んだ。短期間に調査をし終えるためでもあった。しかし，第二次研究作業において，少年層者の家の職業の差異によって，生業語彙（または民俗事象）の知識に異なりが著しく見られることが分った。そこで，私は，第三次研究において，第一次研究と同様に，各地点ごとに，老年層女性1名と，少年層女子2名とを，被調査者とする。

(ハ) 第三次研究作業は，昭和52年から開始される。

第三次研究作業の具体的内容については，続稿（2）に記したいと思う。

○おわりに

「中部地方の方言についての方言地理学的研究」は，第二次研究作業に入り，暫次討究しうることとなった。

中部地方域について，第二次研究作業での臨地調査を終えたいま，私は感慨深いものがある。それらの一端を以下に記してみる。

(イ)当該域方言もまた，地形・地理の自然に即応して存立しようとする。言いかえれば，土地と斗い共存する生活の歴史のありかた（方向）が，方言の姿を決めていると直覚された。(ロ)行政的なくまどりが，方言生活を規制していることが多かろう。(ハ)方言進化の認められることが注目される。静岡県・山梨県・長野県の少年層者が，「知ってるズラ」は言わなくても，「知ってるラ」は積極的に言うと答えるなどは，その一例である。(ニ)地域的な方言特性（気質）は継承されているとされよう。(ホ)北陸（福井・石川・富山）の各県に共通するゆすりアクセントの隆盛が注目された。(ヘ)名古屋文化圏を中心に，「知ってミエル」などの敬語が伝播して，周辺の敬語体系を侵蝕しようとしていると思われた。(ト)中部地方域の方言は，複雑な様相を見せる。はたして「中部方言」と言いうるであろうか。

諸言語現象の中部地方域でのありようを見るにつけ，当域人間の言語生活史について考えるさいも，種々の視点を総合しなければならないことを，私は痛感したのである。

中部地方の方言についての方言地理学的研究に，今後，私は，積極的に努力してゆきたいと考えています。先学の学績に学びつつ，本研究をのばし深めてゆきたいと考えます。大方のご指教をお願いする次第です。

私の中部地方の方言についての研究に，藤原与一先生のひとかたならぬお導きとお激励とをいただきました。記してあつくお礼もうしあげます。

（1976，9，10）

A Dialect Geographical Study on Dialects of the Chūbu Area in Japan (I)

Yoshio Ebata

In this study I make it my chief aim to bring light on the dialectical situation of Chūbu Area in Japan and to find out the rules of human language.

The Chūbu Area consists of 9 prefectures (Gifu, Aichi, Nagano, Yamanashi, Shizuoka, Fukui, Ishikawa, Toyama, Nīgate) and its surroundings.

Corresponding to the aim above, I have been developing the next processes of the research activities;

1) The 1st Research Activity

From 1966 to 1968, I had investigated the dialects of the old and the young by 285 items at the districts of the Aichi prefecture and its surroundings.

2) The 2nd Research Activity

For eight months in 1976, I investigated the dialects of the two generations above by 48 items at the Chūbu Area, and I am now analyzing the results obtained by the investigation.

3) The 3rd Research Activity

I will begin the 3rd Research Activity in 1977, and investigate the dialects of the same places on the basis of the results of the 2nd Research Activity.

Now, in this paper I tried to interpret the distribution of 'Ari' as one example of the 2nd Research Activity.